

http://www.ihatov-u.jp/

# **NEWS LETTER**

~岩手の復興を人材育成から、今こそ連携の力で!~

Index	
■ ご挨拶 「本格復興」に向けて	1
■トピックス	2~7
○いわて高等教育コンソーシアム、国文学研究資料館3研究グループ合同講演会「なぜアーカイブズは必要なのか 一文書保存の意義と実態」	
○大槌小学校図書室レイアウト整備	
○紫波町図書館での影絵人形劇の開催	
○平成25年度後期「 いわて学 」	
○きずなプロジェクト	
○学習支援交流プロジェクト	
○平成25年度後期集中講義 「危機管理と復興」	
○先端科学特別講演会 「次世代モビリティの動向について」を 遠隔地講義システムで高等学校へ配信	
○平成25年度高大連携 「ウィンターセッション」	
○ヤングリーダーズ国際研修2014 in いわて	
○平成25年度いわて高等教育 コンソーシアムシンポジウムを開催	
○FD合宿研修会	
○第14回平泉文化フォーラム	
■ ~復興へ~〈第2回〉	3
■ 大学同士の連携が、地域を発信する 商品の開発へとつながりました!	5
■ 特別寄稿「復興へのメッセージ」	8

■ 特別講義報告集

「復興は人づくりから」発刊

# ご挨拶

# 「本格復興」に向けて

全国大学コンソーシアム協議会に加盟している 組織数は、2013年度で46組織です。加盟団体数 は、大学が586校、短期大学が125校、放送大 学、高専等が56校です。いわて高等教育コンソー シアムでも、2013年度には、5校から7校となり、 2014年度には、さらに、3校の短期大学部が加盟 の予定です。



いわて高等教育コンソーシアム 地域人材育成推進委員長 岩手県立大学 副学長 齋藤 俊明

全国の大学コンソーシアムの取り組みとして、 多い順では、単位互換、学生交流、生涯学習、高大連携、産官学地域連携、 留学生教育・交流、図書館連携等となっています。重点課題は、財政の安定、 地域における認知、協力体制の構築、関係機関とのネットワークの確立、人 員の充実、新規事業開発、常設事務局の確保の順となっています。

いわて高等教育コンソーシアムにおいてもさまざまな取り組みを行なっていますが、同様の課題を抱えています。参加校が連携を強化し、地域の中核を担う人材育成、地域社会の発展に寄与するということが趣旨ですが、5年が経過して、参加校の増加という状況において、これまでの取り組みを再検討する時期が到来しているように思います。

例えば、単位互換は、地理的条件もあって、受講生はほんのわずかです。 他にも、数多くの事業において、参加校の有する有意な資源を十分活用でき ているかとなると、少々疑問です。それぞれの事情もありますが、高等教育 機関に求められる役割が複雑多岐にわたっている状況においてはなおさら再 検討が必要なように思います。

再検討にあたってふたつの視点を指摘します。ひとつは、いわて高等教育コンソーシアムでもすでに実施してきた事業ですが、教育の質保証、社会人基礎力の涵養という点から、アクティブ・ラーニング、学修成果指向による授業改善、高大接続等の取り組みの見直しによって、地域の中核を担う人材育成をさらに充実したものにするということです。

もうひとつは、各機関の資源を総動員して、岩手県全体を包括する「知のネットワーク」をどのようにして構築するかということです。すなわち、いわて高等教育コンソーシアムが、地方自治体、産業界等と協働して「希望郷いわて」の創造に向けて、岩手県民すべてにとっての「知のネットワーク」をいかにして構築するかということです。

東日本大震災津波から3年が経過しました。いわて高等教育コンソーシアムもさまざまな取り組みを行なってきました。しかし、事態はさらに複雑さと深刻さの度を増しているように思います。3年を振り返ってみて、人材育成においても、地域貢献においても、5年、10年先を展望した、「本格復興」のための取り組みが求められているように思います。

# いわて高等教育コンソーシアム、国文学研究資料館3研究グループ合同講演会「なぜアーカイブズは必要なのか一文書保存の意義と実態」

#### ■アーカイブズとは

「アーカイブズ学」は欧米はもとより、アジアでは中国・韓 国においても重要視されています。アーカイブズ学とは、簡 単にいえば公文書を保存し研究する学問ですが、日本では大 学等でこれを扱う機関がほとんどなく、あまり知られてもいま せん。しかし、例えば古代の文献史学などは、ほとんど公文 書だけを対象として展開されているといっても過言ではない かもしれません。要するに、日本ではアーカイブズ学は発展 しなかったけれども、幸運にも残された公文書に文献史学は 多く寄りかかって展開してきたといえるでしょう。そうした公 文書を残すということが、ようやく日本においても東日本大震 災等の災害の経験を経て注目されるようになり、公文書管理 法が作られました。もちろん、こうした公文書保存の動きは、 震災以前にも日本全国で行われていなかったわけではなく、 国立公文書館を筆頭に国・県・市町村でも公文書館や文書資 料室を設けているところもあり、全国各地では温度差があり ます。

#### ■被災地 岩手県の実情

では、岩手県のアーカイブズの実情はどうかといえば、県も公文書館を有しておらず、今日までアーカイブズについて高い意識を持っていたといえる状況ではないといえるでしょう。そうした実情を踏まえて、いわて高等教育コンソーシアムでも、平成25年3月16、17日に行ったシンポジウム「東日本大

震災の検証と来るべき震災の備えへの提言一資料保存と救済のあり方から」では、第2部「公文書保存のあり方」において公文書の必要性を扱って提言をまとめました。また、喜ばしいるとに岩手県でもこの大震災以後、いくつかの市町村でアーカイブズに対して具体的な動きがみられます。その一つが遠野市です。

国文学研究資料館では、毎年アーカイブズ学の成果を地方公共団体に浸透するように、主に公共団体で文書管理にあたっている人たちを対象としたアーカイブズ・カレッジを、国文学研究

資料館(立川市)と地方で開催してきました。そして、今年度はそのアーカイブズ・カレッジを遠野市で開催することとなり、そのアーカイブズ・カレッジに招聘された講師の方々を講演者とする一般向け講演会を、アーカイブズの必要性を強く提言しようとしているいわて高等教育コンソーシアムとの共催で開催することになりました。

#### ■講演

講演会は2部構成になっており、第1部は「アーカイブズの意義」をさまざまな角度から講演されるもので「東日本大震災後、公文書管理は変わったか(日本経済新聞社・松岡資明氏)」「アーカイブズと民俗学一報告書『花輪祭り』の実例から(盛岡大学教授・大石泰夫氏)」「ビジネスアーカイブズと地域社会(元虎屋文庫研究主幹・青木直己氏)」「公文書管理法を活かして記録を残す(国文学研究資料館助教・加藤聖文氏)」という内容でした。また、第2部「地域社会におけるアーカイブズ」は具体的な地域社会とアーカイブズの実例を話されるもので、「アーカイブズの管理と災害対応~遠野市の事例から(遠野市文化研究センター調査研究課長・小笠原晋氏)」「被災文書の保存活用と市町村における文書中間保管庫の設計(国文学研究資料館准教授・青木睦氏)」という内容でした。

当日は一般の方々ももちろんですが、関東や関西からもアーカイブズに関わる方々が参加され、全国的に注目された講演会となりました。





会場の様子



左から青木(睦)、小笠原、加藤の各氏



会場からは質問も出ました

【開催日時】 平成 25 年 11 月 17 日 (日) 13:00 ~ 17:00 【会場】 ホテルルイズ 3 階 万葉の間 【プログラム】

<u> </u>					
■第1部 アーカイブズの意義 (13:00~15:30)					
日本経済新聞社 松岡 資明 氏		「東日本大震災後、公文書管理は変わったか」			
盛岡大学 教授	大石 泰夫 氏	「アーカイブズと民俗学-報告書『花輪祭り』の実例から」			
元·虎屋文庫 研究主幹	青木 直己氏	「ビジネスアーカイブズと地域社会」			
国文学研究資料館 助教	加藤 聖文 氏	「公文書管理法を活かして記録を残す」			
■第2部 地域社会におけるアーカイブズ (15:45~17:00)					
遠野市文化研究センター 調査研究課長	小笠原 晋氏	「アーカイブズの管理と災害対応~遠野市の事例から」			
国文学研究資料館 准教授	青木 睦氏	「被災文書の保存活用と市町村における文書中間保管庫の設計」			

パネルディスカッション [講師全員]

#### 大槌小学校図書室レイアウト整備

#### ~被災地の図書修復。整備研究チーム活動報告~

大槌町では震災をきっかけに大槌小、安渡小、赤浜小、 大槌北小の 4 校が統合して 2013 年度から新生・大槌小学 校が開校しました。プレハブの仮設校舎の一角に図書室も設 けられていましたが、併設されている中学校と兼用で生徒に も児童にも使い勝手が悪い状態でした。

今回は小学校が図書室を全面利用できることとなり、児童が図書を「探しやすく、使いやすい」ようにとの要請を受け、盛岡大学の千准教授が中心となって書架配列のリニューアルを行うこととなりました。

リニューアルのポイントは大きく2つです。1つめは児童書と絵本が混配されて並べられていたものを、「絵本」「日本の児童書」「外国の児童書」の3つに区分けして配列したことです。絵本と児童書を区別することで、低学年の児童は絵本を、中学年以降の児童は児童書をより探しやすくなるようになりました。

2 つめのポイントは背ラベルの請求記号の改訂です。4 校

が合併したために図書の請求記号もバラバラな扱のというにという回は一般の名をした。今回は一般の名をはいるの音順で請求記号を新たに付与しました。2月13日に行ったリニュ員に行ったりと13日に行ったり開発には、教師は表には、教師は表した。26名参加しました。

探しやすく使いやすい図書館にリニューアルしたことで、児童のさらなる読書習慣の形成に貢献できたのではと思います。



リニューアル作業の様子



2月13日に参加してくれた 盛岡大学の学生のみなさん

## **紫波町図書館での影絵人形劇の開催** ~被災地の図書修復・整備研究チーム活動報告~

東日本大震災の被災により84世帯196人が沿岸地域から紫波町に避難しています。小学生以下の児童・幼児は32人ほどおり、不自由な避難生活を強いられています。2012年にオガールプラザに開館した紫波町図書館より、避難世帯の子ども達の癒しや楽しみとなり、さらには図書館の活性化にも貢献できる影絵人形劇を開催してほしいとの依頼があり、2013年12月15日に「影絵であそぼクリスマスinオガール」と題して、影絵人形劇を開催しました。

盛岡大学短期大学部の9名の学生が影絵人形の作成準備から携わり「ブレーメンの音楽隊」と「へんな森」の2本を上演しました。

当初は80人程度の集客を想定していましたが、当日は予想の2倍近くの150人もの児童・保護者が集まり急遽、追加の座席を用意するほどの盛況でした。初めて影絵人形劇を間近で観た子ども達も多く、影絵人形劇に大喜びで、よきクリスマスプレゼントとなったようでした。

上演後は参加した 学生ととがもたち動かして遊ぶなどとが出いる を持つことが出いる した。保育士や幼ま した。保育指す学 遺れとなりました。 な経験となりました。



子どもたちと一緒に影絵人形劇で遊ぶ様子



影絵人形劇に参加した学生と指導を行った岩崎准教授

### ~復興へ~〈第2回〉

文化財チームにおいては先進事例の調査を通じて、復興の出発点には「震災の記録と記憶をどのようにしてとどめるのか」ということをしっかりと置いておかねばならないと痛感しています。人類はいまだに自然災害からは逃れられていません(あるいは永遠にかもしれません)。つまり、同じような自然災害は次にまたやってくるのです。その時に人命を救うのは、「震災の記録と記憶がどのようにして後世の災害時に生きる人に共有されているのか」ということではないでしょうか。

阪神淡路大震災の被災地には「人と防災未来センター」があり、中越には中越大震災の「中越メモリアル回廊」という 震災を考えてゆく施設があります。前者の前身の博物館ができたのが 2002 年、後者が完成したのが 2012 年ですから、震 災後相当の年月が経ってからです。東日本大震災の被災地では、まだまだこうしたものを考えられる時には来ていないと いえるでしょう。しかし、日々震災を伝える資料は失われていきます。阪神淡路の場合には、震災直後からさまざまな市 民団体などが震災の資料を集め、それが人と防災未来センターに引き継がれることになりました。中越メモリアル回廊は 被災した中山間地域が、震災の記憶とともに新しい地域づくりしてゆく柱として形成されてきました。東北の被災地にも、 これから何年か後にこうした施設を作ることができたとしても、そこに展示するものがなければ作ること自体が大きなむ だになります。

整地作業が本格化する今こそ、震災の傷跡を伝えるほんのちょっとしたものでも、それを保存しておくことの必要性が 高まっているのではないでしょうか。

地域研究推進委員会 文化財の被災調査及び修復についての研究チーム

#### 平成25年度後期「いわて学」

「いわて学」は、平成22年度から開講し、前期・後期の2つの授業を行なっています。 平成25年度後期は、『「平泉から知るいわて」~いわての復興を考える』をテーマに、10月12日(土)から12月7日(土)までの15回開講、学生79名が履修し、平泉を核としたいわての「地域特性」「魅力」「復興」について学びを深めました。

平泉の現地講義では、歴史や文化に直接触れると共に世界遺産登録後の活気を

感じ、志波城古代公園の現地講義では、平安時代における東北地方の蝦夷が、朝廷といかに関わりをもって生きてきたかを知

ることができま した。



平泉での現地講義の様子



志波城古代公園での現地講義の様子

	実 施 日	テーマ・内 容	講師
1&2	10/12(土)	○授業概要説明 ○グループワークで考える平泉	岩手県立大学 豊島 正幸
3&4	10/19(土)	○平泉から知るいわての歴史	盛岡大学 熊谷 常正
5	11/9(±)	○平泉から知るいわての資源 (漆)	净法寺漆産業 松沢 卓生
6	11/9(1)	○平泉での現地講義に向けて	盛岡大学 熊谷 常正
7& 8&9	11/16(土)	○平泉現地講義	盛岡大学 熊谷 常正 岩手県立大学 豊島 正幸
10&11	11/23(土)	<ul><li>○現地講義</li><li>志波城古代公園・盛岡市遺跡の学び館</li></ul>	盛岡市教育委員会 今野公顕 岩手県立大学 豊島 正幸
12	11 (20 (土)	○世界遺産と三陸復興 (1)	大槌町教育委員会 佐々木 健
13	11/30(土)	○世界遺産と三陸復興 (2)	釜石市教育委員会 森 一欽
14	12/7(士)	○平泉の情報発信と地域振興	岩手県県南広域振興局 筒井 則裕
15	12/1(11)	○グループワーク(まとめ)	岩手県立大学 豊島 正幸

#### きずなプロジェクト

12/26~28 (2泊3日) の日程で関西の女子大学生グループ (関西MyDoガールズ) が釜石・大槌の女子旅マップを作成するために取材に訪れました。きずなプロジェクトではこの活動に協力し、地元岩手の学生からみたマップの感想や意見を述べたり、取材場所 (グルメや観光スポット) の案内をしました。この活動に参加した学生から活動報告が届きましたので、ご覧ください。

12月26日から28日に釜石市と大槌町で関西 MyDo girls (今回は奈良女子大学、甲南女子大 学) とコラボし、女子旅マップ作成の案内役を努 めました。

一日目は、釜石グループと大槌グループに別れお店巡りをしました。その中で、震災当時の話やお店が開店するまでの経緯を聞くことができ、震災が起きたことを前向きに捉え、辛い中でも一生懸命運営するマスターの思いに心打たれました。

二日目は、事前にアポを取っていたお店の取材 に行きました。アポを取っていたはずなのにお店が 閉まっているなどのアクシデントもありましたが、 臨機応変に動き予定とは違いながらも目的を達成 できました。

今回の活動を通して自分が知らない釜石、大槌の良さを見つけることができ、また、とても良いマップができると確信しました。しかし、良いものが必ずしも使われるということはなく、使ってもらえるようにどのように広報していくかも大切です。このマップを多くの人に使ってもらえるようにこれからの活動も頑張っていけたらいいと思っています。

一関工業高等専門学校 制御情報工学科 4年 長嶺 一輝



取材したお店



取材の様子

#### 学習支援交流プロジェクト

岩手大学ア・カペラサークルVOIVOI は10月6日に釜石市青葉公園商店街で行われた復興イベントで小中高生との交流を目的としてア・カペラの演奏をしてきました。私たちの演奏に乗せて一緒に歌ってもらうというものです。商店街自体は未だに仮設店舗のままでありましたが、そこを利用する人々、小中高生から高齢者まで皆さんに活気が感じられました。歌っているのに対して自然と口ずさんでくれたり、一緒に踊ってくれたりと、私たちも一緒になって楽しむことができました。

しかし、現状はまだ復興したとは言えない状況です。小中高生が遊べる場所もあまりなく、この状況を何とかしなくてはと感じます。子どもたちに楽しく過ごしてもらうために、早い復興とともに、私たちのような大学生が率先して被災地の子供たちを元気づけていかなければならないと感じました。私たちはア・カペラというツールを通じて今後も沿岸に元気を届けたいです。

岩手大学 人文社会科学部 4年 竹澤 圭祐



復興イベントの様子



釜石市青葉公園商店街の皆さんと

#### 平成25年度後期集中講義「危機管理と復興」

前期の「ボランティアとリーダーシップ」共々、震災復興特別講義として、「いわて学」や「地場産業・企業論/企業研究」と並び、コンソーシアムのコア科目として位置づけられています。

昨年度同様、全国大学コンソーシアム協議会を通じてボランティア教員として名乗りをあげて頂いた教員により授業は進められていますが、今年度は在外研究に出られたり入試業務で日程の都合がつかない先生がおられたため、昨年度とは授業の一部(2回4コマ)を変更して実施しました。

具体的には、初回に岩手大学の江本理恵先生に、アイスブレークから始めて、危機管理について考えるグループワークを担当して頂きました。初回にこのオリエンテーションを入れたことで、その後の学生間のコミュニケーションがスムーズに行なわれることになりました。

	実施日	内容	講師	所属大学等
1&2	10/26 (土)	オリエンテーション	江本 理恵	岩手大学 大学教育総合センター 准教授
3&4	11/2 (土)	防災教育	城下 英行	関西大学 社会安全学部 助教
5&6	11/9 (土)	災害 カウンセリング	鶴田 一郎	広島国際大学 心理科学部 准教授
7&8	11/16 (土)	都市防災	和泉潤	名古屋産業大学 環境情報ビジネス学部 教授
9&10	11/30		大沼 麻実	国立精神・神経医療研究センター 研究員
9010	(土)		佐藤 麻衣子	アメリケアズ(米国NPO)
11&12	12/7 (土)	危機管理	村田 静昭	名古屋大学大学院 環境学研究科 教授
13&14	12/14 (土)	地域 コミュニティ再生	室田 昌子	東京都市大学 環境学部 教授
15	12/14 (土)	振り返り: グループワーク	後藤 尚人	岩手大学 人文社会科学部 教授

もうひとつの変更点は、5回目に国立精神・神経医療研究センター研究員の大沼麻美先生とアメリカのNPOアメリケアズの佐藤麻衣子先生に、共同でPFA(サイコロジカル・ファースト・エイド:心理的応急処置)の研修を実施して頂いたことです。通常は8時間かかる内容を2コマ3時間に圧縮してもらったこともあり、中身のぎっしり詰まった研修となりました。



第3回「災害カウンセリング」講義



第6回「危機管理」講義

#### 大学同士の連携が、地域を発信する商品の開発へとつながりました!

この特別講義のボランティア講師を務めたことをきっかけに、中京大学総合政策学部の宮川正裕教授(盛岡市出身)は自身の受け持つプロジェクト研究(ゼミ)で、野田村の「くるみ工房くる美人」のオニグルミを使った菓子作りに取り組みました。中京大学宮川ゼミと連携した名古屋市の老舗和菓子屋「菓芸・庵」は、昨年7月初旬よりオニグルミと名古屋コーチンを使用したマフィンやプリン、わらびもちキット等を「産学連携プロジェクト商品」として製造し、店頭販売と大手ネットショップサイトを通じて全国へ発信しています。大学同士の連携が産学連携へ、そして地域を発信する商品の開発へとつながりました。



中京大学宮川ゼミ代表と開発商品

#### ☆中京大学総合政策学部宮川教授のコメント

宮川ゼミの3年生13人が、「岩手のクルミを使って地元の菓子店とともに復興を支援する産学連携仁愛プロジェクトー
Jプロ」に取組みました。マーケティング・マネジメントの理論を実践で活用して、商品開発・価格戦略・販路の開拓・広報活動等を展開し、1月末までにクルミマフィン1,597個、くるみそプリン194個合計28万円の売上を計上させることができました(売上の3%を被災地に寄付)。この取り組みによってオニグルミの拡販による復興支援、菓宗庵の新商品開発・販売支援、そして学生の社会人基礎力向上という成果を得ることができました。野田村の皆さんからは、「中京大学の皆様が新たな中心を据えて、とても巨大な活動領域に拡げられ、一気に拡がるスケール感から大きな夢を与えて頂きました。学生の皆様のやさしさと菓宗庵様の確かな商品作りの力には

大変助けられました。埋 もれていた村の資源を掘 り起こした活動からの新 しい村づくり=復興して



オニグルミを使用した「くるみマフィン」

いく姿を見守って頂きたいです。皆様から頂いたこの度の大きなチャンスを、しっかり記録としていきたいと思います」との メッセージを戴きました。

学生は、『自分たちで考え·行動することで、会社や社会に 貢献することができる』ことを実感し、その成果をまとめて総 合政策学部プロジェクト研究報告会で発表して最優秀賞を受 賞しました。この機会を戴き、お世話になった皆様にあらため て感謝申し上げます。

(※産学連携プロジェクト実施期間:2013年6月から2014年1月末まで)

#### 先端科学特別講演会

#### 「次世代モビリティの動向について」を遠隔地講義システムで高等学校へ配信

一関高専では、毎年先端的な研究や技術開発に従事している研究者・技術者を招へいし、先端科学特別講演会を開催しています。平成25年度は東京大学生産技術研究所客員教授 センターモビリティ研究センターの田中敏久氏を講師に招き、「次世代モビリティの動向」と題して開催しました。

この講演会は一関高専教育研究振興会と一関高専が主催、 一関市と公益財団法人岩手県南技術研究センターの後援で実施したものです。講演の内容として、自動車産業を取り巻く社会・経済環境、次世代モビリティ開発に向けた「産」「学」の新たな連携そして東北の復興と自動車関連プロジェクト等について紹介して頂きました。一関高専では地域イノベーション戦略 「いわて環境と人にやさしい次世代モビリティ開発拠点」プロジェクトに参画し、特に「教材の開発・EVマイスタースクールの構築」をテーマに学生及び教員を対象に講習会や講義を実施しているところでもあり、現在の取り組んでいるEV教育に的を得た講演会となりました。今後の東北の自動車関連産業の発展が期待されるところです。また、学生にはものづくり技術の紹介もあり、大変参考になりました。

この講演会は遠隔地講義システムを介して大船渡高校、岩手大学へも配信され、大船渡高校からは工学系を目指す1、2年生75名が受講しました。







柴田校長あいさつ

講演する田中敏久 氏

会場の様子

#### 平成25年度高大連携 「ウィンターセッション」

高校生が、進学意識を持ち、意欲的に取り組むことを期待して、いわて高等教育コンソーシアムと岩手県教育委員会が共催で実施している平成25年度ウインターセッションを、12月25日(水)~12月27日(金)の3日間開催しました。最初の2日間は、各大学に分かれて、学部毎に大学の授業を体験しました。そして、3日目は、全体会として、会場を盛岡市民文化ホール(マリオスホール)に移して実施しました。県下各地から、宿泊を含め3日間の講習に約600名が参加しました。この全体会では、各学部を、人文・社会科学分野、理学・工学・農学分野、そして医学・歯学・薬学分野に分けて概要を説明し、大学教育の全体像の理解を図りました。



全体会の様子

#### ヤングリーダーズ国際研修2014 in いわて 一震災からの復興と持続可能な社会ーを実施

「ヤングリーダーズ国際研修」は、いわて高等教育コンソーシアムに所属する学生と、海外交流協定校などに所属する学生が、英語、日本語をはじめとする複言語を使いながら共同作業やフィールドワークなどをすることでコミュニケーション能力、課題解決力を高める合宿型の研修です。

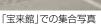
通算5回目となる今回は、2月13日(木)~22日(土)の10日間、「震災からの復興と持続可能な社会」をテーマに、復興ツーリズムなどによる持続可能な町づくりの方法やその課題について検討することを通して、参加学生の「地域課題を国際的な視野・立場で捉えられる能力・意識」を高めることを目的として開催されました。

今回の研修には、本学の海外協定校である5カ国8大学から来県した12人と、いわて高等教育コンソーシアムに所属する学生(岩手大学への交換留学生を含む)19人のあわせて31人が参加しました。参加学生たちは、東日本大震災の実態と復興状況に関する講義や3日間にわたる釜石市内での現地講話、復興スタディーツアーの実体験を通して、復興ツーリズムをテーマに提言をまとめて発表しました。

提言の中には、被災地で見てもらいたい場所を巡る宝探しや食育を兼ねた郷 土料理教室など、多彩なアイデアが盛り込まれていました。

参加した学生たちにとって、国や文化、言語を超えた友情のネットワークが育む機会となり、また、震災からの復興に全力で取り組む様々な人々と触れ合うことにより、人々のネットワーク、情報共有の重要性に気付いた研修となりました。







グループワークの様子

#### 平成25年度いわて高等教育コンソーシアムシンポジウムを開催

平成25年度いわて高等教育コンソーシアム・シンポジウムが、 平成26年2月15日(土)に「花巻温泉ホテル千秋閣グレイトホール瑞雲」を会場として開催されました。

いわて高等教育コンソーシアムでは、地域の中核を担う人材育成と地域の拠点形成の推進を理念として、様々な活動を続けてきました。その一環として、昨年度のシンポジウムでは、人材育成の観点から、高等教育機関へ生徒を送り出す高等学校への情報伝達並びに相互理解と協力関係を築くことを目的に実施されました。

一方、大学教育については、平成24年8月に、中央教育審議会から出された「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて〜生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ〜」の答申において、学士課程教育の質的転換が求められ、特に「学生が



パネルディスカッションの様子

主体的に授業に取り組む能動的学修(アクティブ・ラーニング)の 導入」が強く求められています。

そこで、今年度のシンポジウムでは、基調講演講師に国立教育政策研究所高等教育研究部長川島啓二氏をお迎えし実施しました。テーマを「学士課程教育の質的転換をめざして」とし、昨年度の人材育成の観点を受けて、高等教育機関に入学してきた学生をどう育てていくか、というところに焦点を当てました。今、高等教育機関に求められている「学士課程教育の質的転換」に関わる「能動的学修」の導入」に関して、当コンソーシアムを構成する高等教育機関がその取り組み状況を報告し、この教育課題を共有し、この取り組みの一層の充実に向けて議論を深めました。



川島啓二氏による基調講演の様子

#### FD合宿研修会

平成25年8月22日、23日と合宿形式のFD研修会を行いました。今年度のテーマは「これからの大学評価の在り方と3つのポリシー」です。最初に、大学評価・学位授与機構で第一期認証評価の設計に携わられた大阪大学の齊藤先生から「これからの大学評価」についてご講演をいただき、その後、具体的に「認証評価」でどのような基準を満たすことが求められているのか、そして、それに左右されないような大学にするにはどうすればよいのか、について、ワークショップで学びました。2日目は、第二期認証評価で必須の「3つのポリシー」のうち「学位授与の方針」について、ブラッシュ・アップのワークショップを行いました。

今年度は、ナイトセッションとして、岩手医科大学の佐藤先生、富士大学の筑後先生から、それぞれの大学で取り組んでいる教育改革等についてお話をいただきました。これはアンケートでも大変好評で、コンソーシアムを活かす試みとして、今後も続けていきたいと思います。



### 第14回平泉文化フォーラム

第14回平泉文化フォーラムが平成26年2月1日(土)・2日(日)の日程で、一関文化センターで開催されました。

初日は、はじめに開会行事として、主催者側からいわて高等教育コンソーシアム藤井克己岩手大学学長、岩手県教育委員会菅野洋樹教育長が、次いで地元の一関市教育委員会藤堂隆則教育長が歓迎の挨拶を行いました。フォーラムは東京工芸大学名誉教授清水擴氏の基調講演から始まり、平安貴族の仏教信仰は法華・浄土・密教の3本柱にあり、清衡の中尊寺建立もこの系譜にある

ことをスライドを使いながら説きました。この後、無量光院跡の調査成果他の遺跡報告が3本、平泉の都市景観や平泉思想をめぐる研究報告が行なわれました。

2日目は柳之御所遺跡の調査成果他の遺跡報告2本から始まり、次いで奥州藤原氏の権力基盤をめぐる問題、平泉の食文化の研究等4本の研究報告が行なわれました。いずれも平泉文化研究の現今を象徴する調査研究報告であり、会場からも多数の質問・意見が寄せられ、活況を呈した2日間でした。このフォーラムには約300人が参加しました。



清水東京工芸大学名誉教授の基調講演



平泉文化研究センター 伊藤特任教授

# 後興へのメッセージ

中京大学 教授 宮川 正裕氏 前期集中講義「ボランティアとリーダーシップ」 第6回担当講師

2011年3月11日、一時帰省中であった 私は盛岡であの地震に遭遇し、その後の東北の被害や混乱 を身近に経験しました。停電となった街に雪が降り、そう遠 くない沿岸部では更に恐ろしいことが起こっていたことを ラジオで知り、寒く不安な夜を家族と過ごしたことを今で も鮮明に覚えています。そうした経緯もあって、全国大学コ ンソーシアム協議会経由「地域復興を担う中核的人材の育成」のための教員ボランティア募集の知らせを見て、集中講 義「組織マネジメント」の担当をお引き受けしました。地域 の復興のためには、迅速な措置と中長期的かつ組織的な復 興活動が必要であり、その意味で「復興を担う中核的人材 の育成」は急務であると考えたからです。

集中講義では、「組織のリーダーとして、組織・グループのマネジメントを行う際に必要とされる知識と実践スキルを修得すること」を目標として授業を行い、課題発見と問題解決の管理手法を活用して「東北の復興のためにどのような活動が必要で、自分は何をしたいと考えているか」という課題にグループで取組みました。

履修後に学生たちは、「人と組織の活性化や組織の継続的な発展が、更なる活動に繋がる」また、「リーダーがメンバーの性格を理解して意欲を高めて適材適所に用い、メンバーはボランティアの目的に従って活動していくことが重要。ボランティア活動には持続性が必要であり、そのため組織マネジメントを上手く運営して絆を強くしていく必要がある」といった感想を寄せてくれました。

こうした学びを活かし、地域のリーダーとして人々を導き、大切なことを次世代にも伝えて活動していける人材がひとりでも多く育って欲しいと願っています。

広島国際大学 准教授 鶴田 一郎氏 後期集中講義「危機管理と復興」

第3回担当講師

若い頃、ODA (政府開発援助)の建設 プロジェクトの一員としてサモア独立国 (当時: 西サモア) に赴きました。その当時、「遅れている国」「貧しい国」「働かない国」という偏見を持っておりました。

しかしそれは間違いだと1年半の滞在でわかりました。 「遅れている国」に関しては、確かに物質的には豊かな国ではありませんでした。しかし、どの人も笑顔で楽しそうに過ごしており、おなかがすいている人にいつも食事を振る舞ってくれる人々でした。

「貧しい国」に関しても、確かにお金は持っていませんが、心が豊かな人々で、基本的には自給自足で生活していました。「貧しい」というイメージは住んでみて払拭されました。

「働かない国」に関しても、日中、体感温度が太陽の直射日光を浴びると80度にもなるという環境で、正確には「日中、炎天下のもとでは働けない」ということでした。つまり、朝方、夕方の涼しい時にプランテーションなどの野外での仕事を済ませるのです。

これらの体験からサモア独立国は「進んでいる国」「豊かな国」「よく働く国」であることが分かりました。サモア独立国は10年に一度くらい大きなハリケーンに襲われる地域であります。しかし、彼らの「生活力」「団結力」「生きる力」によって、先進国では考えられないほどの速さで復興していきます。国際支援は実は災害復興のヒントをもらえる貴重な体験なのです。

#### 【特別寄稿について】

この特別寄稿は、いわて高等教育コンソーシアムが平成24年度より新規に立ち上げた特別集中講義で全国の大学からボランティアで講師をご担当いただいた先生方から、「復興へのメッセージ」をテーマに、いわて高等教育コンソーシアム集中講義での担当講義の概要説明や、講義を担当したことで改めて感じたこと、所属大学での復興へ向けた取り組みの紹介、被災地・被災者へ向けたメッセージ等について寄稿していただいたものです。

#### 特別講義報告集『復興は人づくりから』発刊

平成24年度より開講している、いわて高等教育コンソーシアム特別集中講義「ボランティアとリーダーシップ」「危機管理と復興」は、全国各地の大学から駆けつけてくださるボランティア教員に講義をご担当いただき、ボランティア活動に関する知識や技能など、復興の担い手として必要な知見の獲得を目的として行っております。この講義内容をもとに、平成25年10月に冊子『復興は人づくりから〜全国大学ボランティア教員15名による特別講義〜』をまとめました。

この冊子は、岩手県内の高等学校、図書館及び全国の教育関係機関へ寄贈しました。なお、 いわて高等教育コンソーシアムのホームページでも閲覧することが可能です。

http://www.ihatov-u.jp/kankou/index.html



**発** 行 連絡先 いわて高等教育コンソーシアム事務局(岩手大学総務企画部総務広報課内) 〒 020-8550 岩手県盛岡市上田三丁目 18-8 TEL.019-621-6855 FAX.019-621-6014 E-mail:ihatov5@iwate-u.ac.jp URL:http://www.ihatov-u.jp/

構成校

岩手大学 岩手県立大学 岩手医科大学 富士大学 盛岡大学 放送大学岩手学習センター 一関工業高等専門学校